

## 中国史の時代区分論展望

— 日本人の古代区分 —

内藤 戊申

まえがき

一九五七年五月に『中国史の時代区分』（東大出版会、三七三頁）が刊行された。編者は中国史分期論（中国人は時代区分を分期という）のベテランである鈴木俊・西島定生の両氏である。二部に分れており、第一部は、一九五〇年冬に來朝した翦伯贊氏一行との座談会や、翦氏の分期論展望の講演原稿の邦訳、翦氏の持参した原稿（十八世紀上半期の社会経済）の邦訳など、第二部は西島定生・田中正俊・佐伯有一諸氏の展望的論文などから成っている。一九五〇年以後中国学界に起つてきた分期論の主要テーマは、周知の通り古史分期論——奴隸制時代と封建制時代の劃分、近代史分期論——「近代」を細分する劃期論、資本主義萌芽問題の三つである。西島氏は古史分期を扱い、田中・佐伯両氏は資本主義萌芽問題を扱った。近代史分期は何故か扱われていない。この近代史分期について私は今年の東洋史談話会でその問題点を発表した。とにかくこの書はこの点で中国学界分期論の、動向の全貌を示したものとはいえないようである。

一口にいえば、この書は第一部が示すように、翦氏一行來朝の記念出版であり、それを機会に歴史派（この名は実状に合っていないというのだが）の分期論に対する立場を明らかにしたものである。第二部の各論文はいずれも学説史的展望の形をとっている。展望としても大いに役には立つが、しかし目的が展望そのものだけにあるわけでないから、ふつうの展望としてはやや不完全なものになっている。各篇の終りにかなり詳しい関係文献目録がついているが、そのすべてが、望み得る最上のものというわけにはいかない。しかし若い田中正俊・佐伯有一両氏の二篇はなかなかの力作である。とにかくこの書はわが国ではじめて刊行された中国史分期論の専著であり、大いに慶賀すべきことだが、それにしてもわが国では、近年分期的考証の論文は次第に多くなつてはきたものの、分期論そのものは、まだまだといつたところである。

一方中国の分期論は、一九五四年ごろから活潑になりはじめたのだが、年を遡うていよいよ盛である。最近一年間に発表された論文・報告だけでも六〇篇近くに上つている。一九五〇年からの総計は、私の概算では二五〇種ぐらいになる。とても一人の人間が消化できる数ではない。だがさいわいいくつかの展望が出ている。古史分期論には、

林純夫「關於中国古代史分期問題」（『科学通報』一九五五・四）

江泉「關於中国歴史上奴隸制和封建制分期問題的討論」（『新華半月刊』一九五五・一七）

林甘泉「中国の歴史に於ける奴隸制社会と封建制社会の時代区分についての論争」（『人民中国』一九五六・九）

林甘泉氏の日本語文の分は江泉氏の抄訳である。

蕭伯贊「關於中国歴史分期問題」〔東洋史研究〕一四・四、一九五六・三)

蕭伯贊「中國史の時代区分の問題について」〔中國史の時代区分〕一九五七所収)

蕭氏来朝の折の講演原稿であつて、後者は前者の翻訳である。この展望は古史だけでなく簡単ながら近代史・資本主義萌芽問題も扱つている。

西島定夫「中國古代社会の構造的性質に関する問題点」〔中國史の時代区分〕所収)

は、一九五二年ごろまでの主要学説をよくまとめてあるが、最近の論争にはほとんどふれていない。この展望の日本学界の部分は詳しくもあり、まとまりがよい。だがこれも最近の論文には及んでいない。資本主義萌芽問題では、すでに二冊の論集(一九五七・三)が出ているが、展望としては、

「關於中国資本主義萌芽問題的討論」〔新建設〕一九五六・六)

杜真「同右題名」〔歴史研究〕一九五六・七)

田中正俊「中国歴史学界における資本主義萌芽研究」〔中國史の時代区分〕所収)

三つのうち田中氏のものが多い。近代史分期論は最近までの一六篇せんぶが近代史分期問題討論集(一九五七・五)に入つている。展望には、榮孟源「關於中国近代史分期問題的討論」がある。以上いずれもテーマ別の展望であつて、分期論ぜんたいを見透した展望は一つもない。したがつて中国学界の分期論争のあり方、例えばその

テーマの偏りなどを論じたものはまだ現われていない。おかしなことだが何か理由があるにちがいないと思われる。

この「展望」類の文献目録は、最初本稿において中国学界の展望までするつもりだつたので、そのまえおきとして付け加えたものだが、結局本稿では中国学界まで言及できなかったので不要になつた。しかし同学者の手引として便利だろうと思われるので、不体裁だがやはり残しておくことにした。

なおついでにお知らせしておきたい。それは中国では「百家争鳴」の方針に沿つて、学界においては分期諸説が大いに争鳴しているが、学校の教学方針はとうとう学者の結論が出るのを待ち兼ねて、一九五六年に学界とはべつに教学の方針として一つの説を採用することに決定したことである。古史分期では郭沫若氏の西周奴隸説を、近代史分期では、階級闘争を分期標準とする三分説がそれである。郭氏の古史分期では具体的な劃期の年代は前五〇九年(魯国初税畝)から前三五九年(商鞅变法)までのはばがあるので、教学大綱はだいたい商鞅变法を区切りとすることになつたようだ。近代史では、近代を通説どおり一八四〇年から一九一九年(五四運動)までとし、太平天国・義和団・五四運動の三大革命運動を標識として一八六四年・一九〇一年をもつて「近代」を三分する案が採用された。それらのいきさつは「歴史研究」(一九五六・七、一〇)に報告されている。一旦決定して全国に拡まつてしまつた時には、学説の良否にかかわらず、容易に変えることができないだろうことは想像に難くない。中国のように政治が優先する国柄では分期論の将来も山がみえた感じがするのは私だけであらうか。

日本の諸説については、すでに私は「東洋史の時代区分論」(『愛知大学文学論叢』九、一一、一九五四、五五)に学説史の輪廓を展望し、最近西島定生氏が上述の論文で再説したから、新たにつけ加えることは少ない。その上私は本稿のために特に日本人の最近の論文を勉強する余裕がなかつたので、既存の展望に多少の補説を加える程度にしておきたい。郭沫若・翦伯贊氏一行の来朝(一九五四)くらい日本の東洋史学界せんたいが分期論に関心を寄せるようになったと思われるから、考証的な論文で、分期のために拵んだテーマのものや、考証の過程や結論において分期論に関係させたものが多くなつたと想像される。したがつてこれらの諸論文を分期論的にとめて展望することも是非一度はしなければならぬと思う。西島氏の論文の扱つている最近の部分は自説に対する批判、再批判などだけに終始しており、年次的にも一九五五年で終つているが、展望の必要なのはじつは五五年以後なのである。佐伯有一氏の文獻目録には発表年次が示してないので不便だが、いま私は一々調べている暇がない。

**学説史の要約** 中国では民国、いろいろの自由主義(じつは明治の開化主義と同質)はついに有力な分期論を結実するに至らなかつた。自由主義そのものも、最近は例の反胡適論にみられるように、完全につぶされてしまつた。わずかに台湾に残つた人の中から、例えば錢穆「中国社会史上の時代区分について」(『東方学』一二、一九五六・六)のような考えがあることが知られるにすぎない。日本では国史学界はいざ知らず、東洋史学は比較的自由な立場が永く続いた。

清朝の滅亡と民国革命の変動を強く歴史的に意識したのは中国人自身よりはむしろこれら自由主義的な東洋史学者だつた。そこから京都学派の分期論が生れた。一九二七年から始まつた國際的なアジアの生産様式論争はその後日本にも波及し、その論者たちによつて一九三〇年代に、唯物史観による中国史の分期が日本で始めて試みられたが、それらは専門の東洋史学者でなかつたので、すでに高いレベルに達していた東洋史学者には顧みられなかつた。戦後の変動期は長らく抑えつけられていた革新的歴史学者の絶好の活躍舞台だつた。とくに日本史学者の活躍はめざましかつたが、戦後の一傾向である日本史・西洋史・東洋史学者の共同作業の中から、一九四八年ごろ生れてきたのが歴史派の分期説である。そしてその学説の実証の未完成さにも拘らず、それが実践意識による分期説であるところに大きい意義があつた。

京都学派の生れる前から日本には東洋史の分期があるにはあつた。近年和田清氏が再確認され(『東洋中世史』序、一九五三)、鈴木俊氏が一説としてあげている(『世界各国史九・中国史』序説、一九五四)ものがその一つであり、恐らく代表的なものである。古・近の概念による二分説で、歴史の大勢を鳥瞰する立場であり、現代意識は皆無であることが一つの特色である。ヨーロッパ人の活躍が中国に影響し始めた清から近世とし、それ以前の古風な時代を、上古(秦以前)中古(唐まで)近古(明まで)の三期にわけけるもので、これは学界の中心をなしていた那珂通世・桑原隲蔵の諸氏いろいろの通説だといふ。日本の大陸進出、とくに滿鮮進出を背景として明治末年から支那史が東洋史になつた。当時滿・鮮・西域史の研究

が勃興してきたのは、最近東大に南海史が興つてきかけているのと同じく、多分に国家の政策を反映していた。国策が強く打出された一九三五年ごろからは、東洋史の地理的範囲と時期区分にも諸説が多くなつてきたが、その有様は杉本直治郎「東洋史上に於ける時代区分の再検討と時局の認識」(『世界の現勢より見たる史的論叢』一九三九)に詳しい。「東洋史」の分期は、中国内部の変遷のほかに、周辺民族との關係を一つの大きな基準としているのが重要な特色である。過去の「東洋史」の分期は、分期ではあつたが分期論ではなかつた。説明はなかつたが、しかしそれは必ずしも無内容というこゝとはではない。

京都学派の分期論の構想の起源は、文献的には、内藤湖南『支那論』(一九一四)まで溯り得る。まとまつた著書としては稲葉岩吉(君山)『支那政治史綱領』(一九一八參謀本部編)が最初のものだが、その序文にもある通り構想の眼目は支那論によつてゐる。支那論はその自序によれば、一九一三年(民国二年)の十一月から十二月にかけて口述速記された。三月に宋教仁が暗殺され、十月に袁世凱が大總統になつた年であり、民国革命の前途が危まればはじめた年である。著者が畢世の知識を傾けて支那の前途を考えた、いわば経世の書である。日本人ばかりでなく、むしろ中国人に改革のやり方を教えんとした意気のみさえ窺われる、当時としては極めて実践的な書であつた。その実践の立場は今日からすれば佐伯有一氏の指摘する『中国史の時代区分』(二五七頁前後)のように日本の大陸政策の是認を前提とするものであり、その社会経済史的回顧は(佐伯氏の微視的發展觀とちがつて)宋以後に著しい發展を認める態のもの

ではなかつた。しかし巨視的にみれば、中世が宋から始まるとする歴史派などよりははるかに早期の中国社会の發展を認めていたのであり、ただ發展の波長を大きく窺つたためにある年代を限ると、微視的研究者の眼にはそれが停滯論のごとく映つたにすぎない。それはともかく京都学派の分期論の骨格である、唐までを貴族政治(の中世)の時代、宋以後を独裁政治の時代とする構想は上記『支那政治史綱領』にはつきり出ている。ただこの書でも『支那論』でも貴族時代の上限が明確でない。中世の上限(東晉)をはつきりさすためには別の範疇が用いられた。すなわち中国文化の周辺民族への發展と周辺からの反撥という「東洋史」的範疇である(『支那上古史』緒言、一九二一頃講、一九四四刊)。支那史は東洋史にすりかわつた。ここに内藤氏の分期論の弱点がある。分期理論はまず丹羽正義氏によつて強化を策された。丹羽氏の範疇は二つある。一つは「全歴史過程を二大対比となし、現在の実現されつつある文化の時代を近世とし、之と全く異なる文化が実現されたりし時代を古代とし」、両方を含む過渡期を中世とする、一般的範疇である。いま一つは中国史の特殊性を示す範疇であつて、古代(西周より漢まで)は政治的価値(国家)実現の時代、近世(五代より清まで)は普遍的な文化(超国家)価値実現の時代とし、中世は過渡期とする(『丹羽歴史学概論』一九二三、二二八頁以下)。リッケルトの歴史哲学から導かれた文化史観である。

戦後宇都宮清吉氏は丹羽氏とはべつとの観方による文化史観によつて内藤の分期理論を批判し、かつ強化しようとした。「東洋中世史の領域」(『東光』二、一九四七)。「漢代社会経済史研究」一九五五

所収)がそれである。その特色は、文化史の内容を一般的に民族・文化・地域ときめ、それらの変遷が時代をきめる基準となることの一つ、各時代はそれぞれ個性的な「時代格」をもち、発展の相とともに「完結の相」を持つとしたことが一つである。宇都宮氏によれば秦漢に完成する古代の時代格は「礼教的かつ法術的政治性」である。中世は二つの時代格をもつ。六朝の自律性(個人の精神にも社会的集団である豪族・莊園にも自立性がある)という時代格と、隋唐の、政治性と自律性との融合という時代格とである。中世を丹羽氏のごとく単なる過渡期とせず、それ自身完成体とみたところに意味がある。けれども中世を二つの時代格によつてしか処理できなかった点に弱味があり、隋唐帝国の存在は後述の歴研派と同様、ここでも一つの癪になつてゐる。さらにまた、内藤氏は隋唐帝国の存在に眼を奪われることなしに、中国社会は六朝から唐の半まで一貫して世族に支配されていたことを折角ほり下げて発見したのに、その構想が忘れられてしまつた。宇都宮氏はまた、内藤氏が設けた古代・中世・近世のそれぞれその中間にある二つの長い過渡期をも解消した。その説明は略するが、ともかく文化史観としては一段進歩した分期理論だつたと思う。宇都宮氏の分期論の意義は、しかしながららむしろそれが戦後に出現したこと、そして後述の前田典真氏の理論を誘発した点にある。

宮崎市定氏の世界的構想は一九三九年の「東洋のルネッサンスと西洋のルネッサンス」(『史林』二五・四、二六・一)に初見し、一九五〇年の『東洋の近世』に詳述してある。そしてその起源は宮崎氏の西アジア旅行(一九三七)に、さらに桑原鷹蔵博士のアラビ

ヤ研究にまで溯ることは氏の旅行記『菩薩蛮記』(一九四四)を見れば分る。要するにヨーロッパ世界のほかに、西アジア世界を一つの高度の文化をもつた歴史世界と考へ、この二つの世界と東アジア世界との対比において、時代区分の基準の原理を見出さうというのである。三つの世界に共通の歴史現象を抽象すると、それは統一(古代)・分裂(中世)・再統一(近世)という図式になる。東アジアではこの図式は漢の統一、六朝の分裂、宋の統一に対応する。ところがこの理論でも隋唐の統一が邪魔になつてゐる。宋以後を近世とする実証では、宮崎説は内容豊富である。項目だけ拾つてみると、まず氏の得意の交通論では、近世は大運河を大動脈とする運河中心経済の時代だつた(晩清からの最近世は海洋中心時代)。かつまた交換経済の時代だつた。生産は分業(地域的・工程的)の時代に入り、税制では課利(塩などの商品税)が大きくなつた。歴研派では農奴とみなされる佃戸はここでは自由民の小作人と規定される。独裁政治については内藤説と同じだが、そのほかにヨーロッパと同様、ナシヨナリズム(今日の民族主義)をもつて近世の特色とする。文化現象では三世界共通の現象としてルネッサンスがあげられる。このように内容は豊富だが各現象間の体系づけがやや足りない。この骨が折れる。特に社会経済現象については常識的な叙述で、面白くて明快だが、分析の鋭さが欠ける点で、しばしば若い人たちの批判の好餌となつてゐる。ちなみに、近時西洋史学者のがわから、ヨーロッパ史即全世界史でなく、ヨーロッパ史は一つの世界史であるにすぎないという見方が、時代区分と関連して提案されている(前川貞次郎「ヨーロッパ史への反省」『文化史学』一二、一九五

六・一二)。これは宮崎氏の世界史的構想とほんの隣りあわせの提案である。わが国のオリエント史学がもつと発達すれば、このわずかのギャップは当然埋められるはずである。

歴研派の分期論、とくに古代の部分については既述の西島氏の展望があり、私の以前の展望も歴研派に関する部分は今日でもそれほど変える必要はないと思つている。西島氏の今度の展望はかつての激しい態度はなく、よほど公正なものになつてゐる。その上精密な自己批判を行つて、残された問題を丁寧な挙げてゐるのは立派だと思ふ。私がここで改めて展望を繰返す必要はほとんどないわけだが、紹介の意味でほんのあらずじだけ述べてみよう。

一九四八年前田直典氏は有名な「東アジアに於ける古代の終末」〔中国史の時代区分』所収）を前記宇都宮氏の論文の批判として書いた。この論文は二つの新提案を含んでゐる。一つは東アジア史を一つの歴史体として考え、その諸國の歴史の發展段階には時間的にも関連性があるとする。結論として、中国の發展は常に最も先行するが、その早さのずれは昔ほど大きく、年代が降るにつれてはばが狭まる。古代の終末は中國では唐宋・五代（十世紀）、日本では平安末期（十二世紀）というぐあいになるべきである。この提案では朝鮮の平行的な發展のしかたが重要な条件になつてゐるにも拘らず、その後この方面をほりさげる努力がならされてゐないことを私に前に指摘しておいたが、この点については西島氏の展望は頗かむりの態である。第二は、西島氏によれば、加藤繁氏の見解—唐以前には奴隸が相当多く、以後は佃戸が支配的になる—に基いて、唐以前を奴隸社会とみなさんとするものである。前田氏はほんの實証の

見本を示す程度で終つたので、西島氏たちが、この第二の提案の實証に乗り出したわけである。前田提案は当時、石母田正氏等の日本史学者の刺戟を大いに受けて生れたものだった。つとりばやくいへば日本史学者が中國の歴史を日本の歴史に右へならえさせるために古代を唐までひきずり下ろさせた形である。この強引な決定のために歴研派の人々は今日まで大へんな苦勞をさせられてゐると思ふ。一方この提案は戦後にできた「世界史」—西洋史と東洋史を無理論的に併せたもの—の書き直しの時期に當つていたので、またたく間に多くの概説書や高校教科書及び参考書にとりいれられてしまつた。歴研派はあとへひくことができなくなつた。これとやや似た事情は中國の古史分期のばあいにもあるが、提案する方も受入れる方も實踐意識に燃えていた時期のことなので深くとがめるには當らないと思ふ。

西島定生氏の古代分期理論は「古代國家の権力構造」（一九五〇歴研大会報告）に詳しく、その大すじは今日まであまり變つていない。この報告は前田提案のほかに二つの新しいテーマを含んでゐる。第一は春秋戰國の变革を、鉄製農具の出現と旱地農法の成立という生産力の發展によつて説明しようとするものである。中國の郭沫若説と同種の考え方である。旱地農法の成立は共同体社会を分解させて家長的的土地所有制を成立させた。この家長的的土地所有者は共同体から落伍した劣敗者を吸収して家内奴隸主となるのである。この旱地農法論はその後天野元之助氏の鋭い批判を浴びた。そのためかどうか分らないが今度の西島展望には姿を消している。第二は漢代以後の社会を如何にして奴隸制（生産奴隸の）と規定する

かの実証理論である。生産奴隸の数が支配的でなかつたという前提から出発する。小作経営はいつの時代にもあるが、「当時広汎に存在する仮田と呼ばれる小作経営」はいわば家内奴隸主（大土地所有者）の外延にあるもので、その小作人はいつなんどきでも奴隸に身をおとすべき悪条件を具えていたのだから、それは農奴制というには応わしくない。結局こういう状態全体を中国古代の特殊な奴隸制だとみるべきだというのである。この方は今度の展望にもそのまま紹介してある。西島氏はこのあと漢の高祖集團に関する論文（「歴研」一四一、一九四九）を書いたが増淵龍夫・守屋美都雄氏らの批判を受けた。展望の後半はこの論争に費されている。西島氏も自己批判しているように、皇帝とその周囲の者の關係を調べてみても、それが生産關係に結びつかないことは常識で考えても明かなことで、西島氏のこの試みは分期論には大した寄与をしなかつた、と私はみている。だいたいマルクス主義史学者なら何故まず生産關係の究明から出発しないのか私は不思議でしかたがない。史料の困難はむろんあるだろうが、一応人事を尽すべきではなからうか。西島氏は、國家と農民の關係は單なる上部構造でなく、生産關係なのだという（『中国史の時代区分』二〇六頁）。この考え方は中国人にもあるが、どうも私には納得できない。もしそういうことがあつたとしてもそれは短かい期間にすぎず、逆に國家はいつとも、中間搾取を排除して西島氏の考えのように直接人民から搾取したいと願つてはいいたが、仲々思うに任せなかつたというのが実状だつたのではあるまいか。國家は少くとも唐以前は、やはり多くの時期に上部構造だつたと思ふのだが。とにかく西島氏は下部構造（生産關係）を洗うまえに、

秦漢や隋唐の帝國にこだわらずに感じを私は受ける。そしてこの傾向はまた日本の中国古史家の通弊ではないかとさえ思われる。中国学者は、逆に少い史料からいきなり大胆に下部構造の究明にまつしぐらに突入して粗雑な結論を出すのが現在までの通弊だが、最近少しづつ考証が精密化しつつあるようだ。どちらをとるかといへば、私はやはり中国の方が正攻法だと思ふ。精密な考証でない論文として通用しないのが日本の学界の長所でもあるが、同時にまた短所でもある。新しい仕事をするばあいには多少の勇氣が必要だ。今日となつては私はむしろかつての西島氏の勇氣をなつかしむとともに、現在の佐伯有一氏のような馬力を祝福したい氣持である。少々脱線したが、一九五〇年の歴研大会の報告に中國の封建制の成立を受持つたのは堀敏一氏（中國における封建國家の形態）だつた。歴研派の宋以後封建論は周藤吉之氏の佃戸に関する考証を一つの論拠としている。周藤氏の考証を石母田正氏が分析して、宋代の佃戸制を古代末期のコロナート制（佃戸は奴隸に近い）に似ていると考えた。したがつてそれはむろん宮崎氏のいうような近世的な自由な小作人であるわけはなく、当然農奴である。もう一つの論拠は、西島氏の生産力發展説である。西島氏は「硬礎の彼方」（歴研一二五、一九四七）なる論文で、唐代中期以後の華北の二年三毛作普及を明かにした。これと江南の稲作普及などを併せ考えて、この生産力の發展が奴隸制より封建制への移行に対応するといふのである。ところで歴研大会で堀氏が特に問題にしたのは、またしても上部構造の集權國家（宋以後の）であつた。封建時代に宋のような強力な集權國家が生れるのはおかしい。ことにその國家は前

時代の遺物といったものではなく、のち益々強大になつてゆくに至つては堀氏ならずとも当惑せざるを得まい。そこで堀氏はこの難関を切抜けるために、農民の自立性という考えを導入した。そして石母田氏がその論を助けた。黄巢の乱のような大規模な乱を起し得るとき農民をもつ中国では、地方的な領主や大地主では秩序が維持しきれないから、もつと強大な中央集権を必要としたのだ。原則として、中世は分権的ではあるが、上部構造はその時、その土地の生産関係の特殊相に応じて変ることもあり得よう(石母田「封建国家に關する理論的諸問題」一九五〇歴史研大会報告)というわけである。

この解決のしかたは誰がみてもいささか苦しい。最近堀氏は「唐宋の変革と農民層の分解」(「歴史評論」八八、一九五七)において補強を試みている。堀氏が宋以後封建説を強化するために新たにもち出したのは、題名のとおり農民層の分解という考え方である。分解の契機は兩税法の施行だった。錢納を含むこの新税法は農民を流通経済のなかへ捲きこみ、そこから混乱が起つて、「均田農民」から一方では貧農や破産者と、一方では非農民が生じた。非農民の中から塩商のような商人も生れた。江南の豪商を掠奪に向う客商は時に群盜となる。これに多数の貧農が加わつて黄巢の乱のような大乱が起る。客商といひ貧農といひ、いずれも分解した農民であり、彼等こそが唐朝を倒した、というのである。ここまででは話は分るが、これが封建制とう関係するの私にはよく分らない。堀氏の「黄巢の叛乱—唐宋変革の一考察」(「東洋文化研究所紀要」一三、一九五七・一〇の予定)を待ちたい。

最近の分期論 以上ははだいたい一九五〇年前後までの大勢である

が、その後分期そのものには大きな動きは見られない。翦伯贊氏の来朝が刺激になつて分期論はまた活潑化するかと思つていた私の期待は外れてしまつた。とはいふものの若干の進展はあるから、以下私の知つているものだけを紹介してみよう。

分期論そのものとしては、池田誠氏と天野元之助氏のものがあるだけだ。

池田誠氏は唐宋の変革をもつて、中世の再編成であるとみなす。いいかえれば宋の前の唐も中世だった。そして中世の上限はまだ研究していない、という説である。池田氏は、冷い歴史の中に「農民の解放」の動きを少しでもよみとらうとする実践的な思想と、かくかくの事象には必ずそれをそうあらしめる歴史的条件があつたのだとする厳格な因果思想の持主である。この二つの思想を基調として唐代後半の諸事象をつぎつぎに分析的に叙述したのが「唐宋の変革についての再検討」(一九五四日本史研究会大会報告)であるが、要約の専門家をもつて自任する私もこの文学的な演説には匙を投げた。読者自身原文について氏の熱情を味得して頂くより手がない。

天野元之助氏の分期説が日本に生れたのは、翦伯贊氏来朝の影響の唯一の結実だといえる。かつ、中国学界の論争と同じ次元に立つて論争に参加した唯一人の日本人である。天野氏は農業、とくに農業技術史の専門家だから、その分期説は生産力を重視する立場に立つているのもちろんだが、それとともに氏は今日の日本には珍しく史的唯物論に忠実な(むしろ中国風の)マルクス主義史学者であるようだ。その所説は生産関係のみを重視する翦伯贊氏一派とは正反対であり、むしろ郭沫若氏に近い。「時代区分論争に寄せて」(現



代中国「三二、一九五六・三」によつて結論からいふと、殷と西周を「一般的奴隸制社会」、春秋から漢までを「一般的奴隸制から古典古代的奴隸制への傾斜」、六朝を「より高度な奴隸制生産」の時期とみるのである。下限は論じていない。「一般的」というのは顯著でないということであり、「傾斜」も同様である。郭沫若氏は鉄農具の出現の故に春秋戦国を「時代」の転換期としたが、天野氏もこの時代に鉄農具と牛犁耕を認める。しかしその犁はのちに現われる反転犁ではなく単純な形の犁だから、この時の技術進歩は「時代」を測るほど大きなものではない。之に反して六朝の技術進歩こそ劃期的なだから、この時期に高度な生産力發展を認めるべきだといふ論法である。生産關係の分析は荒げずりに過ぎるが、生産力の研究では天野氏ほど系統的にやつた人はいないのだから、その意味でこの試論は強い示唆を——特に六朝に關して——含んでいる。

つぎに分期論に關係のある論文をあげてみよう。中国では殷代が奴隸制だったことは、今日誰も反対する者がない。「殷非奴隸社会論」(『甲骨学商史論叢』一九四五所収)を書いた胡厚宣氏も今日では奴隸制論者に転じているらしい。台湾の董作賓氏の非奴隸説は私はまだ読んでいない。この二人と同じく、精密な甲骨学的考証から殷代が奴隸社会でないことを論じたものに白川静「殷代の殉葬と奴隸制」(立命館大学人文科学研究所紀要「二」)がある。これは郭沫若氏が、殷墟の大墓の莫大な殉葬者を單純に奴隸なりと断じたことへの反論である。白川氏によれば、これらの人殉は饕餮獸と同じ意味の牲であつて、奴隸などというものではない。殷代では羌・南などの外族はいつも人殉狩りの対象になつていたといふ。白川氏の

論証は詳密を極めていてほとんど反論の余地はない。貝塚茂樹氏は一九五六年度の史学会大会で「西周の社会」といふ講演をした。その要旨(『史学雜誌』六五・一二、一九五六・一二)によれば、奴隸制から農奴制への転換は西周中期(前九五〇頃)に現われはじめるが、これは西周の本拠である陝西省内に限られていた。この転換が黄河下流の東方世界で実現されるのは春秋中期ころだが、それも地域によつて早いおそいがある。結局この転換は西周中期から春秋中期にかけての長い過渡期を経て実現したと考える。講演後の貝塚氏の話では、これは范文瀾氏の西周以後封建説と郭沫若氏の春秋中期以後封建説との折衷論だとのことだつた。

戦国から秦漢へかけての時期については、殷・西周に比べてはるかに論文が多い。私がすでに読んだものだけをあげるが、この選択には何の意味もないことをお断りしておきたい。西島定生氏は目下秦から漢へかけての爵制をテーマとして研究しているという話だつた。これは五等爵の爵ではなく、下々の人民にまで及んでいる、いわば市民権の印のようなものであるらしい。このテーマを本にして西島氏は漢代の國家と人民の關係を再検討する意図らしいので、その成果を私は大いに期待している。西島氏の漢代奴隸制論に強く反対する人に宇都宮清吉氏がある。一二〇頁に近い長篇「僮約研究」(一九五三発表、宇都宮『漢代社会經濟史研究』所収)がそれである。前二世紀から後二世紀までの長い間に、いわゆる中世的な豪族と莊園經濟が形成されてゆき、この社会革命は三世紀(三國)に完成する。京都学派の考え方である。僮約は前一世紀(前漢)のニューモア文學だ。これをもつて支配的な奴隸制の証拠とはできない。漢

代でも小作経営は有利であり、小作制は圧倒的に優勢だった。一方漢代では奴隸の値段は高価で、奴隸経営には大きな資本を要した、というのである。奴隸経営と小作経営の細かい比較までした精密な論文だが、居延漢簡の研究に進捗につれて漢代研究はまだまだ進展するだろうから、宇都宮氏の結論も最終的のものとはいえないかもしれない。游侠の研究で有名な増淵龍夫氏、秦の阡陌、爵制の研究者である守屋美都雄、平中荇次氏の諸研究は重要だが直接には分期論に結びつかないので省略しておく。増淵氏の「中国古代社会の発展に関する戦後の体系的把握の試みについて」（『現代歴史学の新動』一九五三所収）は普通の展望とちがって、氏の見識を示す立派な学説史である。私は前の展望を書くときにこの論文に大いにお世話になった。

実証を通じてではあるが、最も分期論に近づいたのは河地重造氏である。農業時代にあつては、生産関係を最もよく表現するものは土地所有制であるが、河地氏は「漢代の土地所有制について」（『経済学年報』五、一九五五）において、端的に生産関係の問題に入つた。河地氏は、漢帝国の国家を西島氏のように、農民から直接に収奪する地主的存在とはみないように見受けられるところがよいと思ふ。氏は漢代にすでに顕著な豪族―私のいわゆる「国家からみれば中間搾取者」―の存在を認める。豪族は奴隸経営者であつたが、後漢に入つて農民の分解が激しくなり、同時に豪族の存在がはつきり浮き出るころから、奴隸主である「漢代的豪族経営は次第にコロニー的な小農経営への依存度を高めていった。」その意味では独立小農民や小作貧農層の担つた歴史的役割は大きい」とする。つまり

ぜんたいとして歴研派の總体的奴隸説に異存はないが国家権力を西島氏のようには理解しない立場だと思われる。河地氏にはなお「書の限客法にかんする若干の考察」（『経済学雑誌』三五・一、二）があり、六朝に入つてからの佃客制―氏は、それは保留なしには農奴制とすることはできないという―の実態を明かにしている。なお京都学派の屋台骨の一つである六朝世族説をそのまま継承し、後漢末から三国にかけての転換期の相を明らかにしようとしたものに狩野直禎「後漢末の世相と巴蜀の動向」（『東洋史研究』一五・三、一九五七）がある。

三国時代には、京都学派と歴研派と一つ一つの論文がある。中世の分裂的傾向を曹操の軍団の構造を通じてみようとするのが川勝義雄「曹操軍団の構成について」（『京大人文科学研究所二五週年論文集』一九五四）である。曹操の軍団は豪俠的構成をもつ。豪族を、知識人として官吏へと進む豪紳型と、在野的な豪俠型とにわけられる。豪俠的軍隊は生活集団から離れた政治的集団であるから、その解散は容易であり、その性格は遠心的分散的だとするのである。この論文に対して西島氏と同種の考え方をする五井直弘氏は「曹操政権の性格について」（『歴研』一九五、一九五六）を書いた。曹操政権の人的構成は「故吏」を中核とする。故吏とは私的な、いわば家の子郎党を、親分が就官の時、その縁故で官吏にしたものなのである。この関係は歴研派の主張の「特色」である、家父長的構成であつて、（西島氏の）漢の高祖集團のばあいと同じく、これは中央集権的なものだ、したがって曹操政権の性格はいわゆる貴族社会のそれではない、というのである。

唐末の变革期を扱ったものに、既述の人々のほか、谷川道雄氏その他の研究があるが私はまだ見ていない。

餘った頁で中国史の分期問題ぜんたいにわたる感想を少し述べ、西洋史の前川貞次郎氏もいつている（前出論文）ように、分期論は実証史学だけの問題でなく、同時にわれわれの世界像や歴史観にかかわる問題である。私がまえから「実践意識」を云々するのは、諸々の歴史観のなかで社会的な実践意識に基づく歴史観や世界像が一番強いという意味なのだ。それはともかく、このようなことであつてみれば分期論の完全な展望をするためには歴史観や世界像の発展、さらにはそのバックである時代思潮の発展をもあつげなければならぬはずである。中国の学界の分期論に対しては特にこのことが必要だと思ふ。中国の学界のばあいは、このほかにソ連の哲学や史学の影響についても注意を払わなければならぬ。つぎに、現在の分期論のあり方が、私のみる所では中国においても日本においてもテーマの扱ひ方が非常に偏している。例えば中国では西周・春秋戦国・秦漢は問題になつても唐宋の变革はぜんぜん研究されていない。近代を細分する「時期区分」は論ぜられるが、「近代」の設定そのものはぜんぜんテーマにならない。資本主義の萌芽の問題も、今日までのところは萌芽のせんざくに終つて、それが「近代」（アヘン戦争以後）に結びつかない。日本人のこの問題に関する研究も今日

までは中国学界と同じく清の盛期で終つているが、しかし日本の学者には清朝中期以後を埋めようという意図は窺える。封建時代にするような動きは一つもない。一方日本の学风はだいたい、变革期をとりあげるやり方に偏している。例えば歴史派のように唐までを奴隸制とするなら、当然その成熟期である南北朝（特に南朝）から隋唐の奴隸制の実態をもつと明かにすべきだと思われるのだが、南北朝に関しては北魏の均田制ばかりが問題になつていていつたぐあいである。中国の近代に至つては、日本人はいつたぐあい思つているのかの輪廓すら私には分らない。分期論はむろん皆無である。歴史派の人々、特に仁井田陞氏などは数年前から近代の上限を調べなければならぬことを提唱していた。その結果が田中正俊・佐伯有一氏等の研究だろうと思ふ。だが近代の正体は何であるかにはぜんぜん及んでいない。半植民地半封建といわれる特殊な社会構造こそ絶好の研究課題と私などは思つてゐるのだが。

本稿の本来の目的はこのような問題を提示するところにあつたのだが、執筆計画のまずさからそこまで到れなかつたことを私は心から恥じてゐる。